つ　ら　ら　（1956年2月3日朝，東京日比谷公園にて）

雪国に育ち，雪や氷に関心を持つものに〝つらら〟ほど詩的で童話的な興味をそそるものはほかにあるまい．かやぶきの屋根のつらら，学校のつらら，工場のつらら，二階の屋根から地面までとどく巨大なもの，風で曲げられたものなどそれぞれ思い出の種を宿している．

つららはどのような条件で形成されるか，どのような形になるか，どのような特長を持つか，どのようなときに曲り，どのようにして横のしまができるかなどは一応説明されるであろう．(1) しかし，ただ一本のつららといえども氷であるからには，結晶軸を持っており，(2) その方向が決められる．氷の結晶格子や，格子欠陥の問題になるとおそらくわかっている分野の方がせまいだろう．

ここでつららの科学を説明するつもりはないし，その資格もない．ただ一つ二つの思いでを語らしていただきたい．

子供の頃住んでいた家の近くに，どんな冬でもつららの下らない家があった．学校に通うたびにその家の前で注意したが，つららは見られなかった．子供心に不思議でならなかったが，あるとき，≪赤貧の家にはつららも下らない≫と気がついて，言いようのない憤りを感じたことがあった．なるほど一軒の家でも，火を燃すへやの屋根にはつららが下り，ほかのへやには下らない，学校でも教員室や小使室には大きいつららが下り，教室には下らなかった．しかし，つららも下らないという貧乏があっていいのだろうか．飢えはててつららも食べられない状態はどんなだろうかと考えたものである．〝飢えの科学〟の中にはつららに関する一項を加える必要がありそうである．

北満で観測をしているときも巨大なつららには一度も出あわさなかった．銭湯や飯店のように暖房のきいている家の軒にはつららが見られるが，大きくならない．水分の補給もさることながら，昇華のはげしさが大きな問題であろう．極寒でも凍らない井戸があって，用水に不自由する家では給水車の世話になるのであるが，不凍井戸のあたりは氷がぎらぎらしており，地面という地面は氷でおおわれ，つららがいくつもいくつも下っているのは，すばらしい景観であった．使役の馬がひずめで氷を掻いては食べ，つららをかじり取っては食べている様子はほかで見られないところであった．飲み水に困ってつららで渇を医すなどは体験したもののみの思い出であろう．

◇　◇　◇　◇

つらら〔△氷柱〕（名）垂氷（すいひょう）・懸氷（けんひょう）・氷条（ひょうじょう）▲氷筍（ひょうしゅん）〔カ〕たるひ（△垂氷）・あまだれ（福島・長野）・あめんぼー（山梨・長野・佐渡）・いけなんりょー（福井）・うったつ（静岡）・おんだら（滋賀）・かなご（伊勢・美濃）・かなんぼ（栃木・群馬・三重）・がら（秋田）・かんだら（熊本）・きだら（広島）・ぎらら（広島）・くらら（高知）・げー（伊豆御蔵島）・さい（出雲・隠岐）・さがりがんくり（千葉）・さや（島根）・しがま（津軽）・しまる（山口）・しみざい（広島）・しもだれ（熊本県天草島）・しゃが（島根）・すぐり（会津・長野）・せんろっぱ（静岡）・たのん（佐賀）・たろみ（長崎・熊本）・ちろりん（広島能美島）・つーとーろ（茨城）・なんじょー（滋賀・島根・広島）・ぬきんだれ（長野）・ひもろ（宮崎・鹿児島）・ぴらんじょー（広島）・ぼーがね（下野）・ほだら（熊本）・まがのこ（久留米・福岡）・まんりょー（広島）・もがんこ（九州）・よーらく（大分）

―― 広田・鈴木：類語辞典（東京堂）から

icicle, n. Tapering ice-formatin, produced by freezing of successive drops trickling from the point of attachhment. ―― *COD* から ――

(1) 畠山久尚　1956：つららと雪の波，科学朝日2月号　14～18.

(2) 吉田・坪井　1929：京都大学理学部紀要　A12, 203.

（伊東彊自）

（写真禁無断転載）